

環境大臣賞 小学生の部

「命の価値」

愛徳学園小学校 六年

田中 侘奈（たなか れな）

「いただきますーす。」

バレエの帰りの車の中。

いつものように、私は母のお弁当にわくわくしながら袋を開けた。

「今日は何だろうな。」

土曜日、朝からバレエレッスンが終わると次のピアノレッスンまで時間がない。だからいつも車の中でお弁当を食べる。

「ハンバーガーだ。玉子チーズバーガー。」

ランチは昨日のハンバーグをはさんだスペシャルバーガーだった。

大きな口でかじりついた。

「おいしい！」

ふた口目。あーん。

「ん？」

視線を感じた気がする。

「うん？ ママ見てる？」

運転中の母を見ると、母の向こう側、隣は大きなトラック。

「あっ。」

思わず口を閉じた。

「それ、僕達だよね。」

そう言われた。気がした。じっと見られている気がした。

トラックの荷台には、たくさんの牛。

以前、遊びに行った牧場にいたその子達とは違う。都会の排気ガスの中でギュウギュウに押し込められている。

ハンバーガーを食べない私に、信号待ちをしている母が気付いた。

「うん？ おいしくない？」

「そうじゃないんだけど。」

母が止まっているトラックに気がついた。

「あー。牛さんのお引っ越しね。」

母は動物が好きで、家には犬と猫、以前はうさぎもいた。犬は二匹。繁殖犬を引退したマルチーズの保護犬。猫は死にかけていた子猫。うさぎは前の駐車場に放置されていた捨てうさぎだ。問題のある子達ばかりなのに、母は手懐け、良い子に育ててしまう。

そんな母は話し始めた。

「牛はね、今から食べられる為だけに運ばれている訳じゃないのよ。育てる為に新しい牧場に行くとか、せりで飼い主が変わって引っ越しとかね。でもお肉になる為に運ばれているかもしれない。」

「かわいそう。」

ハンバーガーが食べられない。

「でもね、牛や豚だけが食べられてかわいそうじゃないのよね。薬はもちろん食品や日用品、化粧品なんかの為に実験動物が使われるでしょ。犬だったり猫もうさぎもヒツジもサルも。毛をかられて毒を飲まされて、有害物質を飲まされて。ほとんどの子が苦しんで死んでいくのよね。」

私は以前読んだ本で知っていた。実験動物本は、目を背けたくなるような写真や本を閉じたくなる内容だった。世界で実験動物として命を終える動物は一年間で一億千五百三十万匹と言われている。日本の人口とさほど変わらない。

「食用となる動物達、実験動物。繁殖犬や害獣、殺処分になる子達。人間の都合で命を奪われる子達。人間てひどいよね。」

「そうだね。でもね、お肉は食べなきゃ大きくなるからね。実験動物も繁殖犬も殺処分もやっと少しずつ減ってきている。それでも命を奪っている事にちがいないから、その事に感謝して、命は無駄にしないように毎日がんばって生きなきゃね。」

母がなぜ動物に好かれるのか分かった気がした。

私の三歳からの夢は獣医だ。

動物は動く物ではない。みんな生きている尊い命。その命を守り、助けられる手助けができる様に、私は日々努力し感謝を忘れず精一杯に生きる。獣医になる。

心に決めてハンバーガーを食べた。